



Data
監督: 白石和彌
脚本: 加藤正人
出演: 香取慎吾 / 恒松祐里 / 西田尚美 / 吉澤健 / 音尾琢真 / リー・フランキー / 三浦誠己 / 寺十吾 / 佐久本宝 / 田中隆三 / 黒田大輔 / 鹿野浩明 / 奥野瑛太 / 磨赤兒 / 不破万作 / 宮崎吐夢 / 沖原一生 / 江井エステファニー / ウダタカキ / 野中隆光 / 岡本智礼 / 本木幸世

■ショートコメント■

◆日本アカデミー賞 4 部門を受賞した『孤狼の血』(18 年) (『シネマ 42』33 頁) をはじめとして、白石和彌監督の近時の活躍は華々しい。『孤狼の血 Part2』の製作が決まる中で、既に『麻雀放浪記 2020』(19 年) が公開されたが、それに続いて本作が公開。『キネマ旬報』2019 年 6 月下旬号が 6 頁～25 頁にわたって本作の巻頭特集を組んだのは、その期待と注目の表れだ。

本作の舞台は、2011 年の 3.11 東日本大震災の被災地である石巻。現実から逃避し、ギャンブル(競輪)にのめり込む男・郁男を演じるのは、SMAP を解散した後それぞれが自立した道を歩みはじめた香取慎吾だ。また、「風待ち」という聞き慣れないタイトルとされた本作のテーマは“喪失と再生の海へ”だ。そう聞くと、否が応でも期待感が高まったが・・・。

◆東日本大震災を取り上げ、「喪失と再生」をテーマにした作品は多い。白石和彌監督と組んで本作の脚本を書いたのは、廣木隆一監督の『彼女の人生は間違いじゃない』(17 年) を私の評価で星 5 つとさせた脚本家・加藤正人氏 (『シネマ 40』272 頁)。

同作では、市役所に勤めながら仮設住宅で父親と 2 人暮らしをしているヒロインみゆきが、毎週末、英会話教室に通うため夜行バスで東京まで行っていると真っ赤な嘘ついて、実は渋谷でデリヘル嬢をしているという設定が秀逸だった。しかし、完全オリジナル脚本の本作では、中盤のハイライトとなる郁夫の妻・毬野亜弓(西田尚美)が何物かに殺害されるという“殺人事件”の扱いがいかにも中途半端だ。ラストの少し前に犯人は明らかにされるものの、死の直前に夫婦ゲンカしていたというだけで、郁男を犯人と疑う(決めつけてしまう?) 石巻警察の刑事のバカさ加減には哑然! また、たしかに郁夫は亜弓の内縁

の夫で、籍を入れていないから、亜弓の葬式の喪主になれないことは仕方ないとしても本作に見るあのお葬式は一体ナニ？さらに、死んだ亜弓が署名して残していた“婚姻届”に亜弓の死亡後郁男が署名するシークエンスを大層に登場させているのを見ると、アレレ…。これを石巻市役所に提出しなかったのは当然だが、その婚姻届と再生の海、そして、タイトルの「風止め」が一体のように扱われるクライマックスを見ていると、更に、こりゃ一体ナニ？ハッキリ言わせてもらえば、本作は明らかに脚本の失敗だ。

◆キネマ旬報の巻頭特集の冒頭は、俳優・香取慎吾のインタビュー。そこでは、“現実から逃避し、ギャンブルにのめり込む男”・郁男についての、彼の思いがタツプリと語られている。また、白石和彌監督と加藤正人氏のインタビューでも、“逃げる男”への思いが熱く語られ、秋本鉄次氏（映画評論家）の作品評では“不器用で不ツキな大男”・郁男について熱く語られている。たしかに、本作を見ていると、郁男のバカさ加減が目につき、やるせなくなってくる。

しかし、それを徹底させればさせるほど、石巻市の人気者だったマドンナの亜弓が夫・村上竜次（音尾琢真）と離婚した後、娘の昆野美波（恒松祐里）を連れたまま5年間も郁男と仲良く暮していたという設定が、いかにもウソっぽく思えてくる。そもそも、亜弓はなぜ郁男のようなバカな男に惚れてしまったの？さらに本作を見ていると、亜弓の父親で頑固者の漁師・昆野勝美（吉澤健）も、氷屋で働いている小野寺修司（リリー・フランキー）もほとんど郁男に優しいが、そりゃ一体なぜ？さらに、石巻市に戻ったことで、実の父親・竜次がすぐ身近になったはずの娘の美波が、亜弓殺しの容疑までかけられている郁男に一貫して優しいのは一体なぜ？

そんな根本の点で、私は本作の人間模様に納得ができない。「フーテンの寅さん」はどうしようもないダメ人間だが、人情味タツプリだし、とにかく善良な人間だから、いくら失敗しても、出来が悪くても、周りにいつも面倒を見てやろうという人間がいるのがよくわかる。しかし、郁男のような人間はほとんど放り出せばいいだけで、面倒を見てやる必要はないはずだ。しかるに、本作後半からの展開は一体ナニ？そして、ラストの“再生のあり方”は一体ナニ？私には到底納得できないが・・・。

2019（令和元）年7月11日記